

# 教師の 腕前診断

文 | 城ヶ崎滋雄 (千葉県船橋市立二和小学校)  
イラスト | 吉田朋子

## 今回のテーマ 甘えのススメ

「甘え」にはネガティブなイメージもありますが、それだけに、「甘えのススメ」という今回のテーマに不安を覚えた方もいらっしゃるかもしれません。

しかし、人は甘えるからこそ自立できるので、「甘え」には「甘えさせる」と「甘やかす」の2種類あります。

「甘えさせる」とは、子どもの都合を受け入れることです。子どもがしてほしいことや感情を受け入れることです。嬉しい時は諸手をあげて喜び、泣いている時は共に涙することです。

それに対して、「甘やかす」とは大人の都合で可愛がることです。

子どもが甘えるのは、不安で自信がない時です。子どもは、その気持ちをわかってもらうことで、不安が解消し、前に進めるようになります。拙稿をご笑覧くださったことで、「確かにそれも一理あるなあ」と思ってくださいると幸いです。

### 1 けがが痛い！

休み時間、他に誰も居ない教室のドアがガラガラと開きます。子どもが「痛い」と言いながら先生の下に駆け寄ってきます。どうやら校庭で指をけがしたようです。しかしながら、傷があるわけでもないし、腫れても



いません。

それでも、子どもは、「ほらここ！ここが痛い」と先生の目の前に指を突き出します。はたして、確かに血が一点、見えています。

### Q1 先生は何と言いますか。

- ①「傷口を水で洗えば大丈夫。自分で洗っておいで」
- ②薬をつけて、「絆創膏を貼ってあげるよ。すぐ治るよ」
- ③「痛かったよね。先生にみてほしかったんだよね」

水で洗えばさむ程度の傷です。大したことはありません。①の「自分で」には「他人の手を借りるほどではなく一人で処置できる程度の軽傷」という安心の意味を込めたつもりです。大人なら傷の程度がわかっているので、同意を得ることで安心できます。

しかし、子どもは違います。大したことはないと思っていれば、自分で傷口を洗ったり、保健室に行ったりしたでしょう。そうしなかったということは、本人にとっては大ごとなのです。子どもは冷たくあしらわれたと感じ、拗ねた気持ちになります。「拗」の旁は「幼」と書きます。大人に手をかけてもらえないことよって幼くなることを「拗ねる」というのです。

そこで再度、「痛い」と訴えます。しかし、それも叶わない結果になると、「もういい！」と臍を曲げてしまいます。これを「ひねくれる」といいます。

「痛い」という言葉の裏に「先生、私のことを心配してくれる？」という思いがあります。つまり、先生の愛情を確かめているのです。

②のように処置をすることで、子どものけがへの心配はなくなります。先生は子どもの希望に応えたので、やるべきことをやったという感じですね。

しかし、子どもは校庭に戻りません。そのまま、自席に着きます。

子どもが見てほしかったものは傷ではありません。「痛かった」という思いなのです。先生が真っ先にかけるべき言葉は、③の「痛かったね」です。「どれどれ」と傷口を確認します。「血が出たんだ。それじゃあ痛かったよね」と「痛さ」を共有します。子どもは傷の痛みをわかってもらえたことで「心の痛み」が和らぎます。

さらに、「痛かったけど、泣かなかったんだ。強いね。お兄ちゃん(お姉ちゃん)だね」と我慢したことを称えます。けがをして褒められるとは思っていないので、ちょっと誇らしい気分になれます。

「じゃあ、先生が薬をつけてあげるからね」と手当をします。手を当てることによって、人の温もりを感じます。それが安心感につながります。この程度のけがなら自分で処置できます。しかし、先生を頼ってきたのですから、それに応えてあげます。そうすることで、心が満たされます。すると、元気が湧いてきます。

最後に、「さあ、これで大丈夫。また遊んでおいで」と送り出すと、「はい」と元氣よく校庭に向かいます。自分を甘えさせてくれた人の言うことは聞くものです。

教師の腕前が試される、学級経営のひと工夫。  
ベテラン先生によるケーススタディです。  
こんな時、あなたならどうしますか？

2 無理だとわかっていても言ってみよう

給食のお代わりには順番があります。自分の班の番ではないのですが、席を離れて「お代わりしてもいいですか」と言ってくる子どもがいます。認めると「お代わりのルール」に反することになります。

Q2

お代わりのルールを守ることを前提にして、先生は開口一番、何と言いますか。

- ① 「好物だったんだ」
- ② 「ルール通りです」
- ③ 「どうしようかな」

②のように言われたら、子どもは「やっぱりね」と諦めます。ルールを遵守することは当然だからです。また、「ダメでもともと」と思っているので、先生に対して不満はありません。ただし、先生から、「わがまま」と思われたのではないだろうかと心配になり、先生のご機嫌を伺ったり、距離を置いたりします。そうすると先生に気に入ってもらうために、よい自分を演じようと無理をします。

③のように先生が迷うと、子どもは「お代わりできるかも」と期待します。また、先生が迷っている間に、お代わりの列は増え、好物のおかずが減っていきます。「迷わないで、さっさと決めてよ」と催促したくなります。子どもはお代わりができるとは思っていません。「今日のおかずは大好物なんだよ」という嬉

しい感情が「お代わりをしたい」という言動になったのです。

ですから、先生がやるべきことは、許すか許さないかではなく、その気持ちを受け入れることです。甘えを受け入れることです。

まずは「大好物なんだ」と共感し、「だったら、お代わりしたいよね」と理解を示します。その後改めて、ルールを守ることを促します。

個人面談でこのことを保護者に話すと、「うちの子は先生に甘えているのですね」と笑っていました。

子どもは甘えているという自覚はありません。その証拠に、「先生、甘えてもいいですか？」とは聞いてきません。甘えはノンバーバルです。そういう意味では無意識の「関係表現」なのです。甘えとは自分が決めるのではなく、第三者が評価するものです。



3 「甘え」は家庭で育てる

私にはすでに成人した娘が二人います。彼女

たちが小学生の頃、寝る前に読み聞かせをしていました。

本を読んでいると、膝の上に乗ってきたり、私の太ももを枕代わりにしたりして話を聞き、いつの間にか寝ていました。読み聞かせが子守唄だったのです。

娘たちは、「本を読んで」とせがみますが、「甘えさせて」とは言いません。「おねだり」で甘えを表現していたのです。

夏休み、鹿児島県に帰省しました。千葉県で教員をしているので、年に一回帰省できればよい方です。

田舎には傘寿を過ぎた母親がおります。事前に「おでんが食べたい」と伝えていたので、手作りのおでんが食卓に並びます。母のおでんは美味しいと評判で、友だちが鍋を持参してもらいにくるほどです。

母は息子に好物を食べさせたいと、店を歩き回って食材を選び、何日もかけて煮込んでいたようです。「味はどう？」と嬉しそうに聞いてきます。朝は、ご飯と味噌汁とさつま揚げが並びます。昼は「美味しいと評判のラーメン屋があるからそこに行こう」と言います。夜は日替わりでお袋の味を堪能しました。

母が楽しそうに食事の用意をしている姿を見ると、「普段は食事制限をしている」とは言えず、出されるものを食べていました。

親孝行とは親の面倒をみるのではなく、わが子が幼かった頃のように面倒をみてもらうことなのかもしれません。親に甘えることが親孝行になるのでしょうか。